

指導技術としての英問英答

広島大学大学院

川 尻 武 信

1 はじめに

問答の歴史は、ギリシア時代にまでさかのぼれるように、問答は、古い歴史を持つ指導法であり、今日においても、それは、教育のいろいろな方面で活用されている。外国語教授の場合も、語いや文法事項を教えたり、学習者の学習状況を把握したりするために、問答は広く活用されている。目標言語、つまり英語で問答を行なえば、英問英答と言えようが、一般的に、英問英答とは、自由会話の前段階で既習の文型などがある程度機械的に練習することである。本稿でも英問英答をこの意味にとる。以下、教授者が英問英答を行なう際留意すべき点を述べる。

2 質問の目的

教授者は質問をする際、まず何の為質問するかと言う事を考えなければならない。教授者による発問の目的に関して、French (① : 90) は次のいずれかであると述べている。

- ① 興味をひきおこすこと
- ② 知っている事を言わせ、それをもとに授業内容をより発展させること
- ③ 学習した事が定着しているかどうかテストすること
- ④ 復習すること
- ⑤ 思考を刺激すること

さらに、上述の目的は、初級段階より後の段階でしばしば存在するが、質問の第1目的となり得ないとし、学習者に正しく話させる事が質問の第1の目的だとFrenchは述べている。つまり、質問や応答が母国語で行なわれないので、教授者は学習者から内容よりも正しい表現形成を持つ応答を先ず引き出す必要がある。

3 よい質問

次に、教授者は、どうすれば良い質問が出来るかを考えなければならない。 Huebener (④ : 121) は、良い質問とはについて次の6項目をあげている。

- ① 明確で簡潔に質問されていること
- ② 思考を要求する質問であること
- ③ 個人差を考慮した質問であること
- ④ 短い言葉でない答えを要求する質問であること
- ⑤ まだ1つの考えを含む質問であること

⑥ 教授者側の質問の目的がはっきりしていること

そして、Huebener は、教授者の質問の大部分をくり返して応答する時が多い初期段階では、解答が暗示されている質問は望ましくないとできないとしている。上述の6項目は、教授者の質問技術の原則とも言えようが、外国語教授において、記憶した内容をチェックする為の質問（記憶質問）が構成、推理、鑑賞、類推等の機能を結集して経験的、反省的に答えさせる質問（思考質問）より多い事を考えること（⑦：107～108）、②は、必ずしも残りの5項目と同列にならべられないのではなかろうか。

上記の6項目以外に、学習者がすすんで答えようとする様な質問であること、質問には、易から難への配列がなされていることなどが付け加えられよう。

4. 英問英答の型

教授者は、自分の好みの疑問形だけを学習者に練習させたり、教授者がいつも質問ばかりしてはいけぬ。自由会話に進む為に、学習者は、いろいろな型の文を練習しなければならない。そこで、英問英答の型を系統的に捉えておく必要性がでてくる。これに関して、Palmer（⑤：63～73）、Gauntlett（②：94～99）、Gurrey（③：85～96、101～106、136～138）による英問英答の型の分類が代表的なものであろう。Gurrey の場合は、読解をチェックする為の英問英答の型であるので、ここでは、Palmer と Gauntlett の場合を略述する。

Palmer は、質問を①一般疑問文（Yes, No で答えるもの）②選択疑問文（問いが A or B と言う形をとるもの）③特殊疑問文（疑問詞を用いるもの）に分け、長さによって、質問を①短い質問（例：“What must you have when you write?”）②長い質問（例：“What is it necessary for anyone to have if he wants to write a letter or postcard?”）に、応答を① laconic answer（例：“Is this a table?”）に対して“Yes.”）② short answer（例：同上の疑問文に対して“Yes, it is.”）③ long or echo-like answer（例：同上の疑問文に対して“Yes, it is a table.”）とに分けている。

次に、Gauntlett は、質問と応答の文型によって質問と応答が統語的に同じ型のもの（homo-syntactical question-answer work）例：“Are you there?” “Yes, I'm here.”、②質問に対し応答が統語的に一部異なるもの（homo-hetero-syntactical question-answer work）例：“Will you be there?” “Yes, I think I'll be there.”③質問と応答が統語的に異なるもの（hetero-syntactical question-answer work）例：“You like chocolate, don't you?” “Yes, when I feel unusually tired.”に分けている。

5 コミュニケーションをめざす英問英答

英問英答は、反復練習ほど単調にはならないが英語の型の練習であるので操作活動が支配的になりがちである。しかし、英問英答は、自由会話の前段階であるから、その練習を操作活動からコミュニケーション活動へ移行するように教授者は留意する必要がある。そのためには、視聴覚教具などを使用して、質問範囲を広げたり、場面を教室内だけに限定しないで学習者に興味のあ場面を設定するなどの工夫がいる。

英問英答が、操作活動に終始しないため、そこで行なわれる問答と実際のコミュニケーションで行なわれる会話との違いも教授者は、充分認識しておかねばならない。外国語学習を目的として意図的に行なわれる対話つまり問答と、情報の伝達を目的とした自然な対話つまり会話との違いがあるのは言うまでもないことであるが、問題は、どのような違いがあるかということにある。この点に関して、Richards (⑥: 136 ~ 141) は、テキストにあらわれる一般疑問文の答え方と実際の発話でのその答え方の相違を述べている。

Richards によると、Yes か No かの有無、問いとなっている疑問文の動詞か助動詞かのくり返しを含む文の有無などによって、一般疑問文の答え方を6つに分けている。Class I は、Yes か No かだけの応答であり、Class II は、Yes か No かに問いとなっている疑問文の動詞か助動詞かのくり返しを含む文が付加される応答である。Class III は、問いとなる疑問文の動詞か助動詞かのくり返しを含む文はないが、Yes か No かに肯定や否定を表わす表現が付加されている応答であり、Class IV は、Yes も No もなく、問いとなる疑問文の動詞か助動詞かがくり返される文を含む応答である。Class V は、certainly とか of course などの Yes や No と同義の表現からなる応答であり、Class VI は、Yes も No もないが、応答文の文脈から肯定か否定かが理解できる応答である。“Are you British?”を例にとると、次のようになる。

Class I	Yes. / No.	Class II.	Yes, I am / No I'm not.
Class III	Yes. From London.	Class IV	I am.
Class V	Of course	Class VI	I was born in England.

上述の分類を基に、現代小説にあらわれている会話(表1で written English corpus), ネイティブスピーカーのインタビューを録音したもの(表1で spoken English corpus), テキストをそれぞれ分析し、Richards は次のような結果を出している。

表1 一般疑問文の答え方— Richards による分析の場合

	Class I	Class II	Class III	Class IV	Class V	Class VI	質問数の総計	調査対象
Total	78	22	104	28	117	226	575	Written English
Percent	13.56	3.83	18.09	4.87	20.35	39.30	100	corpus
Total	27	32	68	20	50	89	286	Spoken English
Percent	9.44	11.19	23.78	6.99	17.48	31.12	100	corpus
Total	5	135	9	20	18	33	220	Text book A
Percent	2.27	61.37	4.09	9.09	8.18	15.00	100	(First Year)
Total	2	44	11	45	19	4	125	Text book A
Percent	160	35.20	8.80	36	15.20	3.20	100	(Secoun Year)
Total	30	229	19	40	21	50	389	Text book B
Percent	7.71	58.57	4.89	10.28	5.40	12.85	100	
Total	—	122	94	—	—	1	217	Text book C
Percent	—	56.22	43.32	—	—	0.46	100	
Total	—	994	—	—	—	—	994	Text book D
Percent	—	100	—	—	—	—	100	
Total	—	718	11	—	—	1	730	Text book E
Percent	—	98.35	1.51	—	—	0.14	100	

どのテキストも Class II が最も多いが、自然の発話では、Class VI が最も多く、Class II は、比較的少ないことがこの表からわかる。この結果から、Richards は、答え方の困難度および実用度を考えると、Class II を必要以上に重視する理由はないとし、初期段階の学習者には、Class II でなく、Class I を教授すればよいとしている。

Richards のこの主張は、前述のHuebenerがよい質問として掲げている 6 項目の第 4 番目と対立する。答えの文の内容だけでなく構造にも注意を払うとき応答は、なるべく長いほうがよく、Class I よりClass II のほうが重要になる。一方、内容面だけから答えの文をみれば、Class I で充分と言える。Class I かClass II のどちらを指導するかは、学習者の学習段階による。しかし、Class I かClass II かどちらを先に導入するかに関しては、容易さと実用性からみて、Class I を先に導入すべきではなからうか。

日本で現在使用されている 3 つの中学校教科書 (*New Horizon*, *New Prince*, *Total* でいずれも本文のみ) を Richards と同様の方法で分析すると以下ようになる。

表 2 一般疑問文の答え方—日本の教科書の場合

	Class I	Class II	Class III	Class IV	Class V	Class VI	質問数の総計	調査対象
Total	—	108	—	—	1	—	109	Text book F
Percent	—	99.1	—	—	0.9	—	100	(First Year)
Total	13	33	3	—	2	2	53	Text book F
Percent	24.5	62.3	5.7	—	3.8	3.8	100	(Second Year)
Total	5	—	—	2	1	1	9	Text book F
Percent	55.6	—	—	22.2	11.1	11.1	100	(Third Year)
Total	4	114	—	—	—	1	119	Text book G
Percent	3.4	95.8	—	—	—	0.8	100	(First Year)
Total	14	40	1	—	1	—	56	Text book G
Percent	25.0	71.4	1.8	—	1.8	—	100	(Second Year)
Total	6	5	—	4	1	3	19	Text book G
Percent	31.6	26.3	—	21.1	5.3	15.8	100	(Thrd Year)
Total	7	54	—	—	—	—	61	Text book H
Percent	11.5	88.5	—	—	—	—	100	(First Year)
Total	12	23	—	—	3	2	40	Text book H
Percent	30.0	57.5	—	—	7.5	5.0	100	(Second Year)
Total	—	4	—	—	4	2	10	Text book H
Percent	—	40.0	—	—	40.0	20.0	100	(Third Year)

分析の結果、日本の教科書も、Class II が最も多い場合がほとんどであり、いずれの教科書も Class II がはじめに導入されていることが明らかになった。他のClasses に対するClass II の割合と Class II からの導入はともに充分検討する必要がある。

6 おわりに

英問英答に関して、教授者が留意すべき点を5つの観点から述べてきたが、指名する際の指導原理（例えば、質問のあとに指名することなど）、学習者が教授者の質問に答えられないときの対処の仕方、学習者からの質問の対処の仕方などふれなければならない点を多く残した。しかしながら、教授者が発問する際に留意すべき点はほぼ概観できたのではなかろうか。

〔引用文献〕

- ① French, F. G. (1963), *Teaching English as an International Language*, Oxford University Press.
- ② Gauntlett, J. O. (1961), *Teaching English as a Foreign Language*, Macmillan Co. Ltd.
- ③ Gurrey, P. (1955), *Teaching English as a Foreign Language*, Longman.
- ④ Huebener, T. (1965), *How to Teach Foreign Languages Effectively*, (Revised Edition), New York University Press.
- ⑤ Palmer, H. E. (1921), *The Oral Method of Teaching Languages*, W. Heffer and Sons Ltd.
- ⑥ Richards, J. C. (1977), "Answers to Yes / No Questions," *ELTJ*, 31, 2, pp. 136-141.
- ⑦ 田崎清忠 (1969) 『英語教育技術』大修館。